

ニューテクノロジー振興財団 設立20周年

マイクロマウスと共に歩いた20年 記念座談会【後編】



マイクロマウス価値観を広める

先川原—私が公演とか、メディアにロボットを紹介する時、一番聴衆に受けるのが水中蛇型ロボットとマイクロマウスの優勝したロボットで、小学生から大人まですごい反響があるんです。なのに、なぜもっと注目されてメディアに取り上げられないのか、やはり少し地味なのかなと感じています。さまざまなロボコンの紹介をした時、アンケート取ると毎回マイクロマウスが面白いと出るんですね。面白いというのは本能的に面白いので、大幅にルールを変えて全然違うものにする必要がなくて、もう少しくまく見せるだけで全然違う効果があるような気がするんですが。

表 田—本質的にはスピードがやはり面白いんですよ。迷路を大きくすることで直線距離が伸びると見ていても楽しい。それは非常に技術的に新しいチャレンジを促す、つまり長い直線距離ができると新しいトップスピードに合わせて全部考え直さなくてはならない。とにかく今の固まった状態を突き崩してやるのが、面白さを生むひとつの大きな要因になるんじゃないかなと思います。

先川原—マイクロマウス時代の技術が、一部カーナビの探索技術に使われて社長賞を貰ったなんて人も居るらしいですが、何か実際の物づくりに役立っているということをおアピールできるようなものを、ウェブ等で紹介できないでしょうか。今大企業に所属している人で、昔マイクロマウスを

やっていたと声高に宣言できる環境ではないですね。あの時の技術が繋がってこういうものを開発したとか。それを中高生が見て、チャレンジしてみようという気になるようなコンテンツが増えると良いですね。

油 田—あの人は今。技術の繋がりを見せる方法として、過去に完走した人のリストが全員載っているページを作るのはどうだろう。マウスを完走した人のリストが載っていて、その人たちが今何やっているのか書いてある。完走者のリストなんて本当に探せば全部出てくるんだよね。

田 代—少なくとも少なくとも全国大会レベルは出てくるはずですけどね…(笑)まあこちらで把握できていないところは書き込んでくださいとお願いすれば良いですから可能ですよ。

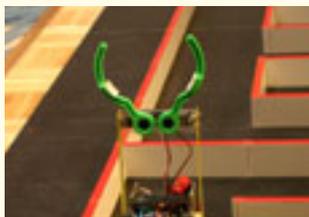
油 田—マウスは言わばロボットの甲子園。僕らの世代ですら、あいつ甲子園行ったんだよって言うのはこの年齢になってもまだヒーローですからね。(笑)

より難しいチャレンジへの挑戦

田 代—今回、もう一度考えてみたかったテーマのひとつとして、2009年に迎える第30回大会の事があります。毎年大会を開催するだけで精一杯という現実はあるのですが、せめて3年後に向けての中期計画は作って行きたい。具体的には、例えばイベントとしてもっと大掛かりにやる世界大会とか。個人的にはアメリカのグランドチャレンジみたいな方向が好きで、マウスをちょっとひ弱に育て過ぎたなという反省をしています(笑)。

油 田—本来は、陽が当たっても、屋外でも走れ、そういう技術に進化しないといつまでも使えない技術に留まってしまう。簡単に言うと、100メートルや400メートルのトラックをガイドなしで走ることだけでも大変だろうし、確かに面白いですよ。皇居一周でもいいしね(笑)。

田 代—もう少し先を見据えると、50回大会までにはここ





まで到達する、そのための第一チャレンジを第30回大会でこういうルールでやります、29回大会にはイベントとして実験的競技会をやります、という話を来年辺りに表明できたら何かが見えてきそうな気もするんですが。これについては、また皆さんにアイデアを頂きつつ、現実的な面ではスポンサーを口説いて行かないと実現できない事です。

油 田—30回大会だから、追いつき解決するのは駄目で、できるという確実性がないとたぶんできないと思うんですよ。30回大会は夢を語っていれば良い部分で、技術的にはそれを試すことができれば良い部分と、結構課題は多いので、急いでやりましょう!(笑)。筑波ロボコンは、3年間課題を決めています、細かいところでは毎年ルールが変わっているんです。とにかくチャレンジさせるだけさせて、後でそれは禁止と言うだけ。どちらかと言えばマイクロマウスでの経験から言っている部分があります。

先川原—そうか。必要に応じてルールも変えて行けば良い訳ですね。

油 田—歴史的にはマイクロキャット競技は迷路を抜けるロボットで、それが入門という意味でも大変な意義があったけれども、例えば、今はマイクロマウスのサイズで作るのがそんなに大変ではないので、その意味では半分サイズとか、もしくは3分の1サイズで復活させることも考えられますね。60センチと18センチだったんだから、18センチと6センチかな。半分じゃ迫力に欠けるな。

田 代—でも、それぐらいの比率でしょうね。

油 田—3センチっていうとかなり難しいな。世の中に売られているモーターは使えません。モーターから自分で開発しないと使えませんと。つまり、世の中で売られているコンピュータでは使えません、自分でコンピュータ作らないとダメですよ、という話なら面白い。

麦 田—その3センチっていうのが非常に。

油 田—チャレンジングでしょ(笑)

田 代—またまた技術屋の目に戻ってきましたね。(笑)

マウスの将来に向けて

油 田—マイクロマウスは、つまり自分の技術を互いに自慢する、皆に提唱する、というすごく良い文化ができています。

先川原—それはロボコンの中でも少ない、非常に良い環境づくりができていますよ。

麦 田—それは奥の深さに関係があるんですね。教えたからすぐできるものでもない(笑)。たぶんみんなの頭の中には、真似できるんならやってみなさいという余裕があるからできるんですよ。まるっきり真似されるのなら言わないし、競技そのものもここまでは続かない。

田 代—アイデアだけで勝てる競技じゃないから、というところが大きいんですね。アイデアを出すことが、ひとつは工学の原点として大事なんだと主張される部分もある。しかしアイデアは重要だけど、新しいアイデアで新しいシステムを実現するためにはそれに応じたさらに高い技術が必要なんです。そこが多くの人にとって面白いと思われるところなんでしょうね。

麦 田—27回と聞いて思い出しますが、最初に参加した時、その時だけ家内が一緒に付いてきたんですがね。その時実はお腹が大きかったんですよ。

油 田—実は麦田さんの優勝したロボットは常に奥様の「のりこ」という名前がついていたんです。

麦 田—で、その時の娘が今26歳なんですね。そんなことを考えればずいぶん時間が経ったもんだと。

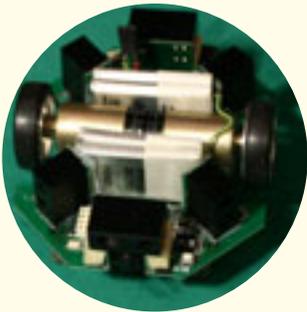
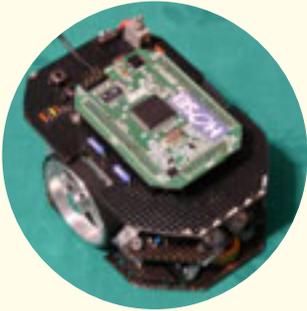
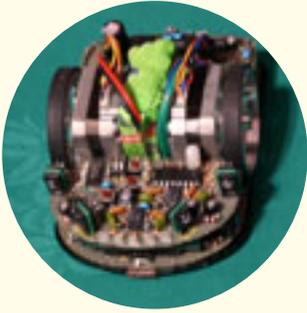
田 代—弟子の井谷さんがその「のりこ」の名前を引き継いで、それで毎年、のりこ全国大会で優勝し続けた伝説のマウス「NORIKO」シリーズですよ(笑)。

先川原—伝統が継承されていくわけですね。縁起をかついで。面白いですよ、これまでずっと技術の話をし続けてきたのに、最後は運の話で、縁起かつぎとかやっぱ最後は人間らしい話になって。

田 代—最後にはお守り乗っけたりしていますもんね、最先端技術の上に(笑)。まあ気持ちは分かりますけど。



New Technology Foundation
The 20th Anniversary



油 田—しかしそれはね、みんな勝つためには技術が必要だとわかっていて、それがたまたま名前の付け方が良かったから勝ったんだと。客観的に見て最後は名前の付け方だとなったら、おかしな競技になってしまうからね(笑)。27年間の結論がこれかと(笑)。

田 代—しかし少なくともマイクロマウスを始める時、二十何年もやるとは思いませんでしたよ(笑)

油 田—それは結論ですけどね。いや～5回くらいは続けたいと思っていました、正直なところ。すぐにできると思わないで下さいよ、5年くらい続けることで色んなことができるようになってきますよ、という気持ちで田代さんと話をしたような記憶がありますね。

田 代—お願いしたいのは、その初心をもう一回(笑)。一生懸命な思いとしてはあるんですよ、忘れたわけでも捨てたわけでもなくて。今回をきっかけとして何か新しいチャレンジをしたいと思っていますので、是非ご協力お願いしますよ(笑)。

New Technology Foundation The 20th Anniversary